2006 Autumn

明治村だより

秋号 Vol. 45

目次

品川灯台　星野 宏和……2
赤坂離宮の家具　彩鸞之間・花鳥之間　……6
企画展「祭のカタチ」……8
秋の明治村―催しものご案内 ……9
A La Meiji-mura ……10

明治村 案内図

平成18年8月26日発行
「明治村だより」第45号（平成18年 秋）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
◎ホームページ　http://www.meijimura.com

製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』　第46号発行のお知らせ
発行時期　平成18年11月末（予定）
申込方法　「明治村だより」第46号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

表紙　北陸東海御巡幸　石川県下越中国黒部川図（部分）　明治11年

品川灯台

星野 宏和

品川灯台設計者　ルイ・フェリックス・フロラン

品川灯台は、明治三年三月五日、洋式灯台として日本で三番目に点灯開始しています。この灯台を建設したのは、横須賀製鉄所の建築課長であったフランス人灯台技手「ルイ・フェリックス・フロラン（Louis Felix Florent）」（写真1）です。

（写真1）品川灯台設計者
ルイ・フェリックス・フロラン

フロランは、一八三〇年、フランスのブルターニュ地方フィニステール県の行政・経済の中心都市であるカンペールに生まれています。十七歳にして彼は、父と同じフィニステール土木局に勤め、現場監督補佐を任され、二十歳の時には既に、道路及び港湾工事の監督指揮官のポストを与えられています。二年後、同じ土木局に所属するブレスト灯台部へ移り、その翌年には、パリの中央灯台部へと昇進し、以降フランス全土の灯台設置工事に携わっていきます。当時、土木局総監であり中央灯台部長も兼務していた「レオンス・レイノー」に、これまでの業績と実力を買われ、一八六六年（慶応二年）に、横須賀製鉄所の建築課長として日本へ派遣されます。来日後フロランは、横須賀製鉄所内のドックや各施設の工事と並行し、日本最初の洋式灯台である観音埼灯台（写真2）、次に野島埼灯台、品川灯台、そして城ヶ島灯台と日本にて計四基の灯台を建設しています。

ブラントンとフロラン

明治の初頭、日本の各地には洋式灯台が次々と設置されていきます。これらの灯台は、慶応二年に幕府と英仏米蘭の四ヶ国との間で結ばれた、改税約書の中の第十一条「日本政府ハ、外国交易ノタメ開キタル　各港最寄船々ノ出入安全ノタメ灯明台、浮木、瀬印木等ヲ備フヘシ」との条文により、設置が約束された灯台です。いわゆる条約灯台と呼ばれるこれらの灯台は、次の八基の灯台と二艘の灯船（灯火を掲げた船）です。

観音埼灯台、野島埼灯台、剱埼灯台、神子元島灯台、樫ノ埼灯台、潮岬灯台、伊王島灯台、佐多岬灯台、横浜灯船、函館灯船

これら条約灯台を含め、明治十年までに日本全土に二十八基の灯台を建設したのは、日本の灯台の父と呼ばれているイギリス人技師「リチャード・ヘンリー・ブラントン（Richard Henry Brunton）」（写真3）と、彼をリーダーとしたイギリス技術者集団でした。

（写真2）
日本最初の洋式灯台　観音崎灯台
（ルイ・フェリックス・フロラン設計）

（写真3）
日本の灯台の父
リチャード・ヘンリー・ブラントン

しかし、品川灯台や観音埼灯台など最初期の灯台は、このブラントンら技術者集団ではなく、横須賀製鉄所の建築課長であったフロランが建設しています。それでは、なぜ最初期の灯台だけはフロランが建設し、以降はブラントンらが建設していったのでしょうか？

日本に灯台を建てることを決めた改税約書は、イギリス大使「ハリー・パークス」が作成したものです。彼は改税約書を作成し、英仏米蘭の四ヶ国と協議し、支払いを延期していた下関賠償金の代償として幕府に調印させたのです。調印の翌年の慶応三年に幕府は、パークスに、灯台の機器の発注及び技術者の派遣を依頼します。この依頼を受け、イギリスからブラントンらが来日し、パークスと明治政府の庇護のもと、日本全国の灯台を建設していくことになるのです。

同年六月、江戸の英国公使館にて、パークスから幕府方へ、本国イギリスから江戸湾の灯台を早急に設置するようにとの命を受けたことが伝えられています。

この時、各施設の建設が進められていた横須賀製鉄所では、すでに灯台を設置できる条件は整っていました。横須賀製鉄所へ船を導くための灯台設置が計画され、すでに三基の灯台機器がフランスから届けられており、灯台技手であったフロランも製鉄所の建築課長として各施設工事に、その手腕を発揮していたのです。幕府は、製鉄所長「フランソワ・レオンス・ヴェルニ（François Léonce Verny）」に、江戸湾の灯台建設を命じ、そしてフロランがブラントンに先駆けて、日本の最初期の灯台を建設していくことになったのです。

品川灯台の設計と設置について

横須賀海軍船廠史には、明治二年十二月二十七日付けの記録に、品川灯台建設に関する最初の記載が見られます。同年十一月中旬、横須賀製鉄所副所長ティボディエにより、さきに議決された品川台場の灯台建設のため、品川湾の地形を調査し、翌年の明治三年一月初旬から工事を開始すると記されています。また、野島埼の仮設灯台で使用された灯器を、品川灯台に利用することも記されています。

フランスのパリ国立公文書館には、「四等級灯火の灯塔の図 YEDO」（図1）と題された品川灯台の設計図が保管されています。図面上には、フロランのサインと一八六九年十二月二十日の日付が見られます。一八六九年十二月二十日は、明治二年十一月十八日に当たり、横須賀海軍船廠史に記されたり、ティボディエが、灯台建設のため品川湾の地形を調査した明治二年十一月中旬と合致します。ティボディエは、灯台建設のための品川湾地形調査に、フロランを同行させ、その後、この設計図が作成されたものと考えられます。

前述のとおり、品川灯台は、改税約書で設置が決められた灯台ではありませんが、設置が決められた観音埼、野島埼灯台の次に設置されています。その設置理由については、場所が隅田川の河口付近であったことから、日本船のためのものであったともいわれてきました。

最近、外交資料館において、品川灯台の設置に関する当時の外務省から大蔵省灯明台掛あての文書が発見されました。そこには、横浜から東京へ船で向かう外国人から、品川台場に小型灯台の設置要望があり、その灯台建設を横須賀製鉄所に依頼したことが記されていました。横浜から船で品川台場を通り、たどり着く先は、築地外人居留地です。品川灯台は、まさに築地外人居留地へ向かう外国人のために設置された灯台であったことが判明しました。品川灯台も、改税約書に記されている「外国交易のために、各港最寄船々の出入安全のため～」に設置された灯台だったのです。

品川灯台の建設

品川灯台の建設工事を請け負ったのは、品川台場の建設工事から横須賀製鉄所内の工事にまで深く関わっていた横浜の名主「堤磯右衛門」です。横浜開港資料館には、品川灯台建設工事に関する記録が記された堤家古文書「相州三浦郡横須賀表御製鉄所御普請中野帳」（以降「工事野帳」とする）や関係資料が保管されており、これらの資料から品川灯台建設の全貌を知ることができます。

まず、工事野帳の明治三年一月七日の頁には、フロランほか横須賀製鉄所役人が立ち会いのもと、品川灯台建設工事の入札が行われ、堤磯右衛門は、二六四両で同建設工事を落札したことが記されています。そして、入札の翌日の一月八日には、副所長のティボディエ、フロランほか製鉄所役人ら

と共に堤磯右衛門らが第二台場に赴き、工事が開始されております。

しかし、横須賀海軍船廠史に見られる品川灯台の起工日は、これより一ヵ月後の明治三年二月八日となっています。堤の工事野帳を見ると、この二月八日には、横須賀製鉄所から品川台場にレンガ五〇〇〇個を搬送したことが記されています。横須賀製鉄所としては、製鉄所から品川灯台建設現場にレンガを搬出したこの日を起工日としていたのです。

工事は、まず基盤整備の根切り工事から開始され、台場という埋立地の場所柄、基礎部分の工事が充分に行われています。堤家古文書には、お台場詰藤助と名乗る堤配下の工事雑用世話役から堤へ工事の進捗状況等が報告された書状が残されています。次の解釈文は、同状に記された起工から約一ヵ月後にあたる明治三年二月十五日の品川灯台工事現場の様子です。

工事は、今日で根石を二方向とも据付けたので、明日からは左官工事に取り掛かります。凡そ三日間、雨天強風で休日でもあったので、日数が予定より掛かっていますが、天気次第ではかどることでしょう。これまでのところをご了承願います。

石工については、今日まで合わせて八名で取り掛かりました。今日の夕方に一名が戻り、明日十六日からは一人となります。石工も予定より日数が掛かっているので、（手当ての関係上）二～三日は石工を差し止めて、左官工事ができたうえで、石工を取り掛からせるようにフランス人に申し入れましたが、聞き入れられませんでした。そこで、一人だけで仕事を続けさせています。

御用船（船頭）と小使については、先日ご相談のとおり、利七に船頭・小使・飯炊きを兼務させています。これらの仕事は、いろいろと経費がかさばりますが、製鉄所のお役人の指示で、このようになりました。まかないについては、場所柄ゆえ、近くの高輪から毎日何かと取り寄せ、夕刻にはお酒でもてなしています。

お役人様の話では、役所の少ない手当ての中から、関係者が来た時の接待費用の不足分は、自ら出しているとのことです。このことから、小使の賃金と御用船の代金は、役所から渡されますので、私どもが受け取るのは勿論ですが、まかない料については、担当のお役人様に内々にご奉公（お役人様へ不足分を提供すること）とすることを、明朝申し上げますので、ご理解願います。まかない料まで受け取れば、その代わりに私や堤様の主人である蔵田家から心付けでも差し上げないと、（不足分を自ら出しているお役人に対し）宜しくないので、いささかの私見ですが、ご理解願います。

私たちも、当月八・九日の両日は帰宅し、十日から今日までは（台場の）詰所にて過ごしました。高桑様（横須賀製鉄所役人）は、昨日はじめて髪結いその他の用事のため上陸し、私も同じく高輪まで上陸しました。

（台場内に建設の）仮役所については、アンケチール（横須賀製鉄所石工頭目）から、大工を十人・釘を大小九二〇〇本と仏文による指示書を出すので、資材の手配をするようにとのことです。本当に大丈夫かどうかと、私からアンケチールにたずねましたが、言語が通じないため、何となく承知しておきました。高桑様にこの件を申し上げましたが、この仏文の指示書で経費が支払われるのでしょうか。というのも、深川から大工を乗せた三艘の船の手配費用が予定より超過し、こちらで支払ったことを申し立てたところ高桑様が、何れにせよ工事が完成した時には、損をしていないようにすると、仰せられましたことをご承知願います。もっとも、超過費用の書類は、横須賀（の堤）に出して決済されるよう、先日談判しました。ただし、アンケチールへの指示書も心もとないため、以上の件をそちらの堤様のもとで、よろしくお取り計らい下さい。なお、諸工程と資材については、今回お送りした絵図面のとおりです。

関東大震災以後の第三台場の内部（「東京の史蹟」より）

遅延している工事状況、工事現場での毎晩のねぎらいの酒宴（うたげ）、接待費用の不足を自腹で出していた役人とそれを気づかう請負業者、今でも見られる外国人とのコミュニケーションで、つい分かった振りをする日本人の悪い癖など、この書状には品川灯台の建設現場で繰り広げられていた様々なドラマが、生々しく記されています。

このほかに、工事野帳からは、前述のレンガの搬入が二月八日の次に、二月二十四日にも二五〇〇個を運び込んでいることが記されていました。このことから、品川灯台には、計七五〇〇個あまりのレンガが使用されていたことも判明しました。

品川灯台竣工

フロランは、明治三年三月一日に品川灯台の建設現場を再び訪れています。外交資料館に保管されている、横須賀製鉄所土木担当の役人から外務省に宛てた書簡には、この時のフロランの品川台場行きについて、次のように記されています。

品川沖二番砲台へ　灯明台御取立て相成り候に付き、今朔日より当製鉄所御雇仏人建築方頭目フロラン相詰候積、然る所、同所に相応の旅宿無之、差支候に付き、其地ホテルへ滞留いたし、日々場所へ罷赴候積に付き、右通船として屋根船一艘雇上げの儀、其筋へ御申付け、出張中諸事差支無之様御取計有之度、此段御掛合および候也

午（明治三年）
三月　　在横須賀土木司
東京外務省御中

この書簡によれば、フロランは建築課長という身分から、工事現場にあった石工頭目アンケチールが詰めていたフランス人詰所には宿泊せず、築地のホテルを利用し、築地から台場へ通う船も、特別に屋根付きのものを手配させています。品川灯台の点灯開始は、フロランが来た四日後の明治三年三月五日（一八七〇年四月五日）です。フロランは、品川灯台工事の完成検査のため品川台場に赴き、彼の検査に合格し、明治三年三月五日に正式に点灯開始が告げられたのです。堤から横須賀製鉄所へ、品川灯台の工事完了届が出されたのも、この三月五日となっています。

後年の品川灯台

「東京名勝尽　品川沖の台場」
歌川広重（三代）画

大正十二年九月に起きた関東大震災により、東京湾周辺の各灯台は、倒壊または大破し、その後コンクリート造りの灯台に改築されています。しかし、この品川灯台だけは、台場と共に九十センチ沈下しただけで、奇跡的に大きな損傷も受けず、建設当時の姿を残し存命しました。

戦後、東京港の拡張工事のため、台場と共に撤去されることとなり、当時日本最古の灯台となっていた品川灯台を惜しむ声が各界から寄せられ、昭和三十二年三月七日、消灯式という珍しい式典が、東京芝浦の工業奨励館にて、東京都副知事、海上保安庁長官を始め、海事関係諸団体、品川文化人クラブ（会長 吉川英治）ら総勢三百人以上を招き盛大に行われています。

この時、最後の品川灯台長となった大立目恭之進氏が、消灯された品川灯台について、灯台職員機関誌「燈光」にて次のように述べています。

灯台史上例のない消灯式という何となく湿っぽい式も、おめでたい雰囲気の中に終わり老二保生（大立目氏本人）も安堵した。

以来、灯の無い灯台として、まことに淋しい姿でたっているが、まもなく解体される筈だ。時の流れとは言うものの、朝夕親しんで来た我々現場職員にとっては、何とも言いようのない寂寥をおぼえずにはいられない。毎晩ガラス戸越しに、赤い灯の点滅をながめながら食べていた夕食であったが、七日以降は灯台の辺りはただ暗い空があるだけで、家族の者も、そちらの方を見るのがつらい風であった。消えてしまうとよく分かるのだが、灯台人にとって、灯台の灯は同時に我々の心の灯でもあるようだ。夜も十二時頃になると、どうしても習慣的に目がさめる、そして窓の外を見る、従来は、灯がついているのを確かめ、安心して又ねむりにつくのであるが、七日以来は、目をさますたびに、ああもう灯はないのかと言う思いをくりかえすのみであった。

昭和32年3月8日付け朝日新聞
品川灯台消灯式記事

八十七年の歴史残して
――音のう振り消した品川灯台

その後、撤去された品川灯台は、東京都により解体保管され、昭和三十九年十月にこの明治村に移築されています。

そして、昭和四十三年四月二十五日、灯台としては初めての国の重要文化財に指定され、日本最古の灯台建造物として、明治村にて文化財としての新たな生涯を過ごしております。

ほしの　ひろかず（海上保安庁　東京湾海上交通センター）

赤坂離宮の家具 二

彩鸞之間・花鳥之間

先号に引き続き、博物館明治村で所蔵している赤坂離宮の家具を部屋毎にご紹介いたします。

彩鸞之間

「明治工業史」には次のように記されています。

彩鸞之間は第二客室即ち第二溜之間にして、飾様はアンピール式なり。天井は石膏の飾型にして、上壁には金箔もて金鸞を彩飾し…（中略）…家具は何れも仏国製にして、椅子には組合せ円椅子、花台付のもの二個、長椅子四個、臂掛椅子八個、中椅子八個、腰掛三個なり。また斑紋花崗石置の大卓一個、金属装飾の置戸棚二個、同壁附台二個を備へたり。

「鸞」とは、「聖人が世に出ればこれに応じて現われるという瑞鳥（大漢和辞典）」で、鳳凰の一種といわれています。壁面上部に金箔がほどこされた鸞が装飾されていることから、この部屋の名がつけられたのでしょう。

博物館明治村には、この部屋で使用された家具のうち「組合せ円椅子、花台付（花台付円椅子）」（写真2）が一脚収蔵されています。円椅子とは言っても、四脚の扇形の椅子を結合したもので（写真3）、円形という性格上、座の前面に比して、背はその幅が三分の一ほどしかなく、深々とゆっくり腰掛けてくつろぐというよりは、迎えを待つまでの暫しの間に使用されたものではないでしょうか。

この円椅子の中央の木部が花台（写真4）です。花台は椅子の背上部にはめ込んでいるだけの単純なもので、側面には、金を用いた華麗な装飾が施されています。装飾法は「明治工業史」に記された彩鸞之間の装飾様式「アンピール」の特色の一つである「オルモール（金メッキのブロンズ金物）」（写真5～7）と言われるものです。

写真1　赤坂離宮正面外観

写真3　椅子内部の結合部分

写真2

写真5

写真4　花台、裏面にはホゾ穴がみられる

写真6

写真7

写真8

余談ですが、円椅子は一脚収蔵していますが、なぜか花台の部分だけは二脚分明治村にきています。椅子を解体して運んでいるうちにバラバラになってしまったためでしょう。

花鳥之間

「明治工業史」には次のように記されています。

即ち饗宴之間にして、数多の貴賓を御饗応あらせらるべき処なり。装飾式はアンリー二世式に依られたり。

室内は総て木曽産の塩地の良材を以て構造せらる。天井は格天井にして之に仏国名画手の画ける花卉鳥獣の油絵三十六枚を貼込みたり。欄間は果実禽獣の図を織出せるゴブラン織十三枚を張込み…（中略）…天井には大吊燭三個を懸け、柱には腕燭十八個を装置せり。床は槻材の寄木張にして、中央には大なる引伸ばし食卓三卓を据付けたり。

椅子は御紋章ある革張の臂掛椅子六十脚を置く。座側に食器台大小八個を備ふ。上部は赤色斑紋の大理石を用いて飾覆せり。室の後方には木製彫刻の大食器棚一基を装置す。（後略）

この椅子も椅子に貼られた「階上第二客室」と記されたラベル（写真8）により、使用場所が確定されたものです。

写真10　修復後

写真9　修復前

写真11

「明治工業史」の説明から、花鳥之間は良質で希少価値が高い塩地（シオジ）材を用いた、華麗な雰囲気のアンリー二世（フランス・ルネッサンス）様式の内装であることがわかります。この部屋で使用された家具のうち「御紋章ある革張の臂掛椅子（菊花御紋章付肘掛椅子）」四十脚と、上部赤色斑紋の食器台大小各一台が博物館明治村に収蔵されています。菊花御紋章付肘掛椅子（写真9・10）は、以前にも簡単に紹介させていただいていますが、山羊皮を紺色に染め上げ、背には十六葉の菊が型押しされた（写真11）椅子で、デザインはルネッサンス様式というよりは、赤坂離宮で多用されているルイ十六世様式を感じさせる軽やかな印象を受けます。

食器台（写真12・13）は重厚なデザインで、内装とは趣を異にしており、脚の部分が獣脚（写真14・15）となるなどバロック様式の特徴を備え持ったものです。また食器台の壁面側は、壁面の凹凸にあわせて凹凸がつけられ、この部屋だけのための用途で製作された家具であるということがわかります。

花鳥の間の椅子四十脚のうち十脚は平成九年に修復をし、山羊皮の複製を製作しました。結果的にはこの椅子が製作された約百年前の技術にはとても及ばないものとなりました（写真16・17）。このときの修理は単に展示するためだけではなく、見学者の方に椅子に座っていただき、室内空間を味わっていただくことを目的とした修理を行いました。結果的には座り心地は戻りましたが、繊細な美しさを取り戻すことはできませんでした。

ここで手短に修理の状況を報告申します。

①修理はオーストリア・ウィーンの工房

国内でいくつかの修理工房などをあたりましたが、椅子の座面が広く、オリジナルと同じ大きさの型や革の調達ができない、との理由で結局ウィーンの工房へ十脚の椅子を空輸し、修理を開始しました。

②革の染色と型押し工程は、フランス・パリの工房で

この椅子の修復で一番大きなウェイトを占める革の製作ですが、ウィーンの工房でも技術がなく、パリの工房で製作することになりました。革の裏面のスタンプ（写真18）から、今回複製を担当した工房がオリジナルを製作したことも判明しました。

張地に使用されている革は当初「牛」の革と考えていたのですが、今回のやりとりの過程で、日本国内ではまず使用することのない「山羊」の革であることが、そして皮の色も修理前は茶色っぽいものだったのですが、鋲をはずしてみると濃紺であることがわかりました。また染色方法ですが、オリジナルのものは表面（おもて）だけを染めているのですが、これも現在の技術では困難であるとのことで、いわゆる「ドブ漬け」のような方法で表裏両面を染めました。

③修理は分業

オーストリアでは木部の修理と塗装、椅子張りなどそれぞれにマイスターの称号を持つ親方のもとでの分業で作業が進められました。塗装のマイスターが木部の傷みを直し、美しく塗装した後、椅子張りのマイスターのもとで、傷んだコイルスプリングの取替え、クッション材の馬毛の補充などが行われた後、革を張りました。

博物館明治村で所蔵している赤坂離宮旧蔵家具の多くは使用された場所や用途がわからないものです。今後も調査を進め、判明し次第、ご紹介させていただきたいと思います。

写真13

写真12

写真15

写真14

写真16　修復前

写真17　修復後

写真18

企画展 祭りのカタチ

明治村秋の企画展「祭りのカタチ」
9月16日～11月26日　三重県庁舎

秋の訪れと共に、豊作を祝う豊饒祭を中心として様々な祭りが行われます。今回、明治村では、四季折々の年中行事や郷土色豊かな祭りをテーマにした郷土玩具を中心に展示し、祭りの起源や意味を併せて紹介します。

◆祭りと郷土玩具

郷土玩具は、それぞれが郷土の生活の中から生まれてきたもので、各地方の特色を持ち、その土地独特の形、色彩に富んだ玩具の呼び名です。これらは、伝染病除けや天災除け、五穀豊穣等その地方の気候風土に密着した信仰の対象が多く、風土と切り離しては考えることのできないものばかりです。

祭りの日には、寺院や神社の境内に露店が並び、その日しか手に入れることのできない、特別な郷土玩具が売られました。そうした郷土玩具を人々がこぞって買い求めた背景には、天災を予知する手段も、病気に対する予防法も普及しておらず、人々が常にこれらの不安にさらされていたことが想像されます。

◆山車と祭り

祭りでは、東日本で神輿(みこし)が、西日本では山車(だし)が多く用いられると言われています。どちらも神様が祭場に移動するための乗物として造られたものです。祇園長刀鉾（写真1）は、日本三大祭りの一つ、京都八坂神社の祇園祭の「山鉾巡行」で練り出されます。祇園祭は清和天皇の貞観十一年（八六九年）、疫病退散のために神泉苑において御霊会(ごりょうえ)を営んだのが始まりだと伝えられています。京都のような大都市では、飲み水などを通じて疫病が流行りやすく、祭りの日時も疫病の流行しやすい旧暦の六月が選ばれていました。現在の祇園祭は七月一日から三十一日まで一ヶ月間行われます。また全国各地の午頭天王(ごずてんのう)を祀る神社で、祇園祭、天王祭が行われています。

旧暦の七月一日から六日間（現在は八月二日から六日間）、青森で行われる「ねぶた」祭りでは、子供が振って楽しむ小型のねぶた（写真2）が売られます。扇型のものの他に、伝説人形や金魚型のものがあります。「ねぶた」は土地によっては「ねぷた」ともいい、農繁期となる秋をひかえて、仕事の妨げをする眠気を燈籠に託して川に流す、七夕行事「眠流し(ねむりながし)」の一つだと考えられていますが、坂上田村麿が蝦夷征伐の折に敵をおびき出す作戦として大燈籠を作り、川に流して首尾よく退治したという故事によるものとも言われています。

名古屋・東照宮祭の山車（写真3）は、九つの町（七間町、伝馬町、和泉町、京町、七間町、桑名町、上長者町、中市場町、本町）から曳き出されます。名古屋東照宮は、尾張徳川家初代藩主義直が、父家康を祀り名古屋城内三の丸に建立されました。祭りは家康の三回忌にあたる元和四年（一六一八）に各町内で神輿行列を行ったのが始まりと言われており、翌年には大八車に西行の人形を乗せた、最初の山車が登場しています。家康の命日にあたる四月十五日から十七日の三日間行われるこの祭りでは、神を奉り、舞楽の奉納を行い、最終日には罪人の特赦がおこなわれ、祭りの間は特別に名古屋東照宮が一般にも開放されました。東照宮祭は代々の藩主によって奨励され、からくりの山車が製作されるなど年々盛大になり、今日郷土玩具に伝えられている姿となりました。

（写真1）京都祇園祭の鉾

（写真4）土地によって表情が異なる

（写真2）青森県のねぶた祭りで売られる扇ねぶた

（写真3）東照宮祭の山車。左手前から宮町、伝馬町、和泉町、京町、七間町、桑名町、上長者町、中市場町、本町

◆祈りを込めた郷土玩具

今日、全国で広く行われる三月三日の雛祭りは元々「上巳(じょうし)」の節句と呼ばれ、人形(ひとがた)で体を清めて、その後に川に流すなど身の穢れを祓う行事でした。現在のように人形を飾り女児の成長を祈る行事になったのは、江戸時代も半ば過ぎといわれており、明治以後、全国的に普及しました。第二次世界大戦以前は、都市を除き、身近にある土・紙・木等の材料により、各地で特色ある雛が製作され、飾られました（写真4）。

岐阜市美江寺の蚕鈴（写真5）は美江寺観音例祭の露店に並んだ土鈴です。美江寺は養蚕が盛んなこの地方の農家の信仰を集めており、この土鈴を買い求めて蚕室に吊して鳴らせば蚕の外敵である鼠よけになり、良い蚕が起きると信じられています。美江寺観音例祭は、俗に「お蚕祭り」とも呼ばれ、現在では三月の第一日曜日がこの日に当てられています。

現在、年中行事の一つとして当たり前のように行われている祭りにも、始まった当初はそれぞれ意味がありました。今回の展示が、身近で行われている祭りの本来の意味と、そこに込められた願いを理解していただく一助となれば幸いです。

（写真5）岐阜県美江寺の蚕鈴

小野の獅子

★秋の催し物ご案内★

村の秋祭り

9月16日～11月26日

〈明治の芝居小屋「呉服座」見物〉

●明治のマジックショウ～日本に伝わった西洋マジック～

9月16日(土)、17日(日)、18日(祝)
①11：00　②13：00　③15：00
出演：東京イリュージョン　木戸銭：300円

●越中八尾のおわら踊り

幻想的な胡弓の調べと叙情的な踊りをお楽しみください。

11月3日(祝)

街流し	13：30～14：00	帝国ホテル前周辺（無料）
呉服座公演	14：30～15：00	呉服座（有料・全席指定）
輪踊り	15：10～15：30	呉服座前（無料）

11月4日(土)

街流し	11：00～11：30	帝国ホテル前周辺（無料）
呉服座公演	12：30～13：00	呉服座（有料・全席指定）
	13：30～14：00	呉服座（有料・全席指定）
輪踊り	14：10～14：30	呉服座前（無料）

出演：富山県民謡おわら保存会

＊ 呉服座公演の鑑賞券（700円）は、桑天市場明治村店、チケットぴあ、名鉄主要駅および駅サービスセンターにて9月16日より発売。

〈村の展覧会〉

●企画展「祭りのカタチ」

9月16日～11月26日　〔三重県庁舎〕
日本全国の祭りにちなんだ地方色豊かな郷土玩具を展示紹介いたします。(8ページ参照)

●明治村写真コンテスト入賞作品展

9月16日～11月26日　〔東山梨郡役所2階〕
四季折々の美しい明治村を撮影した入賞作品を展示いたします。

〈お祭りストリート〉

通りや街角でお祭りパフォーマンスが繰り広げられます。

〈祭りの市〉

レンガ通りに村祭りの雰囲気いっぱいの縁日が登場します。

〈記念日祭り〉

●敬老の日

9月18日(祝)（9月第3月曜日）　65歳以上の方入村無料
〈年齢を証明できるものをお持ち下さい〉
特別シンポジウム　〔聖ザビエル天主堂〕
「100年の命、100年の心～健康に豊かに生きる長寿社会～」
時間：13：00～14：30　（ご自由に聴講いただけます。）
講演：秋山弘子東京大学教授ほか
主催：名古屋大学医学部
後援：犬山市・(財)明治村

●鉄道の日　SLバックヤードツアー（予約制）（10月14日）

9月30日、10月15日・22日、11月5日・23日
対象：小中学生
（小学生3年生以下の方は保護者の同伴必要）
参加費：お一人様500円
（ＳＬ往復乗車賃金込、
入村料は別途必要）
※明治村ホームページか電話で事前にお申し込み下さい。

●灯台記念日　重要文化財「品川燈台」を特別公開（11月1日）

10月28日(土)、29日(日)　〔品川灯台・菅島燈台附属官舎〕
協力：第四管区海上保安本部交通部・燈光会
品川燈台を特別公開するとともに、明治時代に建てられた燈台について展示紹介いたします。

品川燈台

菅島燈台附属官舎内神島灯台レンズ動態展示

●フランシスコ・ザビエル生誕500年記念公演

9月23日(祝)、24日(日)　〔聖ザビエル天主堂〕
舞踊劇「ザビエルはあなたの中で生きている」（ご自由に見学いただけます。）
第1幕 13：00　第2幕 13：45　第3幕 14：30
演出・主演：フランシスコ・ザビエル・ギジエン
主催：ザビエル・エンジェルズ・カンパニー
後援：在日スペイン大使館・スペインカタルーニャ州イエズス会・(財)明治村

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。

天を仰げば

純白の衣をまとったカトリック教会堂―**聖ザビエル天主堂**（5丁目51番地）は、明治二十三年（一八九〇）京都市中京区河原町三条にフランシスコ・ザビエルの来京を記念して献堂された建物です。ほの暗い聖堂の中に入ると、彩り豊かなステンドグラスのむこうに天井のリブ・ヴォールトが広がり、リブ（注1）の交差箇所にボス（BOSS）（写真1）と呼ばれる装飾が付けられています。

ボスは、日本では「辻飾り」と呼ばれ、木造の格天井などの十字に交差した所に設けられる装飾をいいます。一方、教会堂ではゴシック様式の特徴である交差リブ・ヴォールトに設けられ、その材質は石や木などが用いられ、木製のものは胡粉を塗り、彩色が施されています。文様は、すべてキリスト教に関連したテーマにより形作られており、教会堂に貢献した人々にちなんだもの、聖書から引用された故事や人物、聖人、動植物など様々な種類が見られます。日本においてはカトリック教会堂に見られますが、あまり多くは存在しません。古くは、元治元年（一八六四）に建てられた大浦天主堂に確認され、また、紋章（ARMES）と銘句（DEVISE）が描かれているものには、明治十一年（一八七八）に献堂された築地聖ヨゼフ天主堂に確認されます。

この聖ザビエル天主堂にも身廊天井及び側廊天井のリブが交わる箇所にボスがあります（図1）。とりわけ身廊天井の八個のボスが大きく、直径392ミリ、高さ110ミリで鏡餅のような形になっています。材質は欅（けやき）で重量は約6キロ、文様は丸彫りで、生地に胡粉を塗り着色がされていますが、金や銀も塗られていました。今回この八個のボスの内の三個をご紹介いたします。

内陣の祭壇の上に位置するボス（写真2）は、司教の杖によってフランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier）の頭文字FとXを組み合わせたモノグラムで、周囲をアカンサスの葉で取り囲んだ文様が施されています。この場合の×マークはXですが、十字架を45度回転させた×マークは、キリストを象徴する装飾文様としても用いられます。

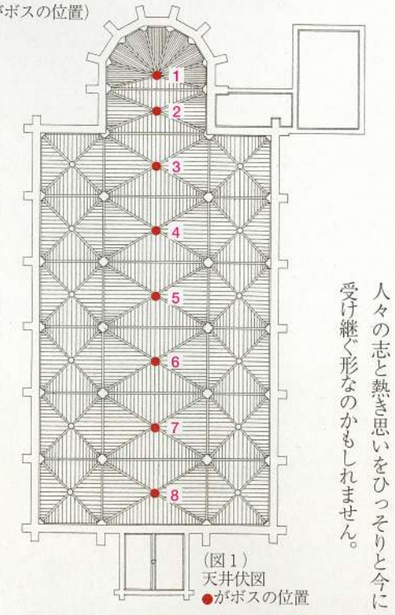
二番目に位置するボス（写真3）は、柘榴をかたどったものです。柘榴模様はルネサンス期にイタリアを中心に用いられ、多産・豊饒の瑞祥模様として流行しました。また、実の中に秩序正しく並んだ多くの種は、権威による統一、特に「教会」そのものをあらわします。

四番目に位置するボス（写真4）はミドン司教（注2）の紋章です。ミドン司教は日本に駐在していたパリ外国宣教会のうち、当時京都を管轄する中部代牧区におり、この天主堂の定礎式において礎石を置き、翌年五月の献堂式ではクーザン司教と共同で式を執り行いました。周囲をカーディナルハット（注3）で取り囲んでいますが、緑色で左右6個合計12個の結び飾りは司教位を表しており、神の計り知れない無償の恵みと、それに伴う使命を表します。下部のリボン状の帯にはミドン司教の銘句「我々を愛してくれた人のために―PROPTER EUM QUI DILEXIT NOS」が刻まれています。

その他のボスには、蓮花をかたどったもの、教会に貢献された司教とその銘句、紋章などが掲げられています。

聖ザビエル天主堂は、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸してから、後奈良天皇に布教の許しを請うため天文十九年に来京し、仏教の都―京都での宣教を夢見て「京の都に聖母に捧げた教会を」との祈りに由来して、およそ三五〇年を経てビリオン神父らによって実現した教会堂です。その内部の天井を飾るボスは単なる装飾ばかりではなく、その一つ一つに宣教への祈りを込めたものであり、ザビエルや宣教に携わった人々の志と熱き思いをひっそりと今に受け継ぐ形なのかもしれません。

（写真1）聖ザビエル天主堂の天井
（○印がボスの位置）



（図1）
天井伏図
●がボスの位置

（注1）天井のヴォールト内輪にとりつけた細いアーチまたはその一部。
（注2）MIDON, Felix-Nicolas-Joseph（1845～1893）明治四年に来日。横浜・東京・長崎で教導したのち横浜聖心聖堂の主任司祭となり、明治21年大阪司教座に移り、京都聖ザビエル天主堂建設の責任者となる。
（注3）カトリック司教の帽子。結び飾りの色と数によって聖職者の位階をあらわし、赤色で左右15個合計30個の枢機卿のものが最高位。

（写真4）4のボス

（写真3）2のボス

（写真2）1のボス

白く輝く内閣文庫の化粧煉瓦

明治村5丁目59番地、小高い場所に建つ本格的ルネッサンス様式の建物は、明治四十四年（一九一一）皇居大手門内に創建された**内閣文庫庁舎**の本館（写真1）です。内閣文庫とは明治政府の中央図書館のことで、かつては裏に書庫棟が続いていました。正面中央のギリシャ・ローマの神殿を彷彿とさせる意匠が目を引きますが、「堅牢ヲ旨トシ」（注1）とされたこの建物は、硬度の高い安山岩の石材と煉瓦を鉄棒で補強した構造（図1）です。外壁面仕上げは一階がモルタル塗り、二階には品川白煉瓦株式会社で製造されたといわれる白色小口（こぐち）タイルが使用されていて（写真2）、明治村への移築当時、竣工以来70年近く経ちながら一枚のはく落も無かったと記録されています。

タイルという名称が一般的になるのは大正十一年（一九二二）の平和記念東京博覧会以降のことで、それ以前は化粧用煉瓦、張付化粧煉瓦、装飾瓦など様々な呼び名が使われていました。明治時代になって建築されるようになった煉瓦造建造物の仕上げには、品質の良い「表積煉瓦」が使われていましたが、それに代わるものとして登場したのが煉瓦より薄い外装タイルです。明治二十年（一八八七）現在の埼玉県深谷市に設立された日本煉瓦製造会社は化粧煉瓦焼成用のカッスレル窯（注2）をドイツから輸入設置し、明治二十三年（一八九〇）の第三回内国勧業博覧会には「装飾煉瓦石」を出品すると同時に「煉瓦陳列館」というパビリオンも出展しています。続いて大阪窯業、岡山の備前陶器の各社も「張付化粧煉瓦石」の製造を開始し、外装タイルの発展が始まりました。

備前陶器株式会社のタイルは、明治四十二年（一九〇九）竣工の旧赤坂離宮（注3）、明治四十四年（一九一一）竣工の横川工務所による帝国劇場（注4）にその名が出ています。内閣文庫の設計者大熊喜邦は大学卒業後横川工務所に入所しており、帝国劇場の基本設計に大熊が関わったともいわれ、その後大蔵省に入省し、初の設計となった内閣文庫で外装材として人気が高まってきたタイルを用いています。

備前陶器株式会社は明治四十二年に磐城耐火煉瓦株式会社と合弁して日本窯業株式会社備前支社となりますが、明治四十五年（一九一二）7月15日付日本新聞の記事に

銀座の電車交叉点附近に自製の各種化粧色煉瓦を張付けた小規模乍ら胸の透くようなハイカラな建物は…日本窯業株式会社のオフキッスで、その工場は備前伊部町及び磐城平町とに在り、何れも約一万余坪の広大な敷地を有している

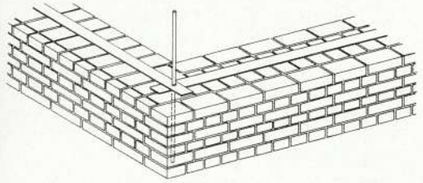
と紹介され、どんな家屋にも容易に貼付し得るこの建築用材は建築界に大変革をもたらしているとその盛況さを伝えています。

明治村の内閣文庫と同じ5丁目に東京駅警備巡査派出所（写真3）があります。大正三年（一九一四）竣工の東京駅前に駅本屋（はんがや）との調和を図るため、駅舎と同じようにデザインされた派出所です。東京駅は鉄骨煉瓦造、派出所は当時最新の鉄筋コンクリート造ですが、そのどちらも表面に化粧煉瓦が張られています。これだけ巨大な建築の外装をタイルで装飾したのは初めてのことで、以後外装タイルの需要は一段と高まっていきます。日本窯業株式会社備前支社となった備前陶器株式会社は大正五年、この品川白煉瓦株式会社の岡山工場となり現在に至っています。

明治期から大正期にかけて煉瓦造が鉄筋コンクリート造へと移行する中で、その表面を化粧煉瓦から煉瓦形状のタイルに置き換えていく。内閣文庫はそんな我が国のタイル外装の始まりを静かに物語っています。

（写真1）内閣文庫

（写真2）2階部分の白色タイル


（図1）碇聯鉄構法『内閣文庫　建築調査記録』より

（写真3）東京駅警備巡査派出所

（注1）「内閣記録課付属書籍庫」の記載より
（注2）カッセル窯ともいう
（注3）「明治工業史建築編」四六四頁「…東西三角中坪の外壁には、在岡山備前陶器株式会社の製造に係る陶製白色煉瓦を使用したり」
（注4）『同右』七一八頁「外部は備前伊部の装飾煉瓦貼りたる鉄骨構造」